室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

ヨーロッパ研修旅行　ドイツで学ぶ英語 - 外に開かれた窓

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2021-03-22 キーワード (Ja): キーワード (En): study abroad, partner university, English in Europe 作成者: クラウゼ小野, マルギット メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/00010381

室工大紀要第 70 号（2021）11～17

特　　集

ヨーロッパ研修旅行
ドイツで学ぶ英語 - 外に開かれた窓

クラウゼ小野　マルギット*1

（原稿受付日　令和 2 年 10 月 30 日　　論文受理日　令和 3 年 2 月 17 日）

European Study Tour
Learning English in Germany -　A window to the outside

Margit KRAUSE-ONO

(Received 30th October 2020, Accepted 17th February 2021)

Abstract
What led to study trips to Europe/Germany? For what reason are they in English? How did the partnership with the WSH Zwickau originate? Which essential role did the ESP (Europa Studienprojekt) play? From which experiences did the students gain and how did they react? Answer to these questions will be given in the following report.

Keywords: study abroad, partner university, English in Europe

1　はじめに

ヨーロッパにおける学生のモビリティは、数十年前から数多くのプログラム（ドイツ・フランスフレンドシップ、後の ERASMUS 、ERASMUS MUNDUS 、SOCRATES 、アメリカの MIDDLEBURRY など）を通じて推し進められて来ており、少し前までは格別珍しいものではなかった。それがコロナで状況は一変してしまった。コロナ克服後、速やかに元の状態に戻ることを願わずにはいられない。翻って日本を見た場合、海外の大学で留学生を含む日本人学生が学ぶ姿は未だ日常的光景とは言えない。

近年、アメリカ留学をメインとして留学に興味を持つ学生が増えているのは、科学政策と経済の発展の影響が大きい。また、ヨーロッパにおける数字がかなり安定しているように見えるということは、ヨーロッパ文化圏への関心もまた非常に高いことを示している。

*1　室蘭工業大学　ひと文化系領域

ツヴィッカウとケムニッツへの研修旅行を例に、大学との協定に至るまでの最初の小さな一歩がいかに重要なものであったか、それについて述べたいと思う。研修旅行に参加した学生たちはヨーロッパとの接触を通じて文化間の理解を深める機会を得、オフィシャルなレベルだけでなく個人のレベルにおいても様々な痕跡をその内に刻み、新たな道の入り口を見いだす可能性もまた得たり、と自分の人生を歩む上で重要な刺激を受け取ることになった。

2 西ザクセン応用科学大学ツヴィッカウ校

2.1　西ザクセン応用科学大学ツヴィッカウ校（*WHZ － University of Applied Sciences Zwickau*）は、その名が示すとおりツヴィッカウにある応用科学大学である。技術、経済、保健医療、言語、応用芸術の分野で学習プログラムが提供されている。

2.1.1 大学の歴史的背景

西ザクセン州の経済、文化、科学、政治の中心地であるツヴィッカウには、高等教育の長い伝統がある。1290 年にはラテン語学校が設立されており、中世末期には既にドイツでは人文主義的な教育の場として知られていた。16 世紀には、自然科学者でもあり人文主義者でもあったゲオルギウス・アグリコラが高等教育に大きな影響を与えた。アグリコラは、1519 年から 1522 年までツヴィッカウのギリシャ・ラテン語学校の校長兼教師を務めた。このようにツヴィッカウは、ザクセン州で最も古い高等教育の伝統を持つ都市の一つである。このような人文主義的な教育の伝統は、ツヴィッカウにおいては西ザクセン応用科学大学ツヴィッカウ校によって継承されている。

19 世紀初頭、ザクセン州南西部の工業用石炭の採掘と加工の場では、技術的に訓練された数多くの労働者が必要とされた。炭鉱の拡大に伴い、ツヴィッカウ地域はザクセン州の機械工学の重要な拠点として発展してきた。その結果、この地域の技術・科学分野における豊富な知識と高い技術力がここに集中することになったのである。急速な産業の発展のためには、企業のマイスター制度を通じての専門知識の伝承だけでは不十分であった。躍進めざましい産業・経済界は、技術者や技能者の需要の高まりに応える教育機関の設立を迫った。1862 年、ツヴィッカウ鉱山学校は石炭採掘の技術訓練を開始した。1897 年には、エンジニアのパウル・キルヒホフとレアンダー・フンメルが市役所の協力を得て、″Ingenieurschule Zwickau″（ツヴィッカウ技術者学校）（後の″Ingenieurschule für Kraftfahrzeugtechnik″（自動車技術者学校））を設立している。

数々の改革と変化を経て、1992 年に設立されたツヴィッカウ技術経済大学は、さらに大学所在地の統合化を図り、1996 年に「西ザクセン応用科学大学ツヴィッカウ校（WHZ）」と改称された。現在、約 160 人の教授が 50 以上の履修コースで約 3,800 人の学生の教育を担当し、応用研究に取り組んでいる。

技術分野においては、教育の重点は今でも自動車分野と密接に結びついている。例えば、この大学における自動車工学、自動車エレクトロニクス、自動車生産、交通システム技術のコースでは、自動車交通の様々な分野を扱っている。また、機械工学、電気工学、物理工学などの古典的な工学コースのほか、コンピュータサイエンス、データサイエンス、デジタルヘルスなどのデジタル化された分野のコースも提供している。

2.1.2 応用言語および文化間コミュニケーション

この学部では、中国語、フランス語、スペイン語/ポルトガル語と経営学のコースを提供している。日常語だけでなく、専門語に関してもそのレベルは高い。英語は、専攻課程にあるすべての学生が学ばなければならない第二言語である。1 年間の海外留学がカリキュラムの一部となっていて、国際性を重視していることが強調されている。手話通訳コースも学部の一部となっている。専攻課程：言語および経営学、手話通訳、言語および経営学（ドイツ語・中国語）　、地域および欧州プロジェクト開発　。

2. 1. 3 学生フォーミュラ

学生フォーミュラは、技術、コスト、マーケティング、スピードのトータルパッケージの中で最も優れたものが優勝を勝ち取るという国際的な学生設計エンジニアコンテストである。2007 年から 2010 年まで、WHZ レーシングチームは内燃エンジン搭載のレーシングカーでこの競技会に参加している。競技は毎年新しいプロジェクトから始まり、そのビジネスプランや設計、デザイン、ドライビングダイナミクステスト、レース順位などが評価される。WHZ レーシングチームは国内外で好成績を残している。

「革新と伝統の出会い」をモットーに、WHZ レーシングチームは国際レースシリーズに 2011 年以来既に 2 度電動レーシングカー部門に出場している。ツヴィッカウを拠点とするこのチームは、全世界で合計 477 チームが参加したレースにおいて世界ランキング 3 位の成績を収めたこともある（2014 年 8 月時点)。以上から明らかなように、彼らは世界最高の応用科学大学チームでありドイツ最高の電気工学チームである。

3　室蘭における語学授業

旧カリキュラムでは、第二外国語は 1 期と 2 期の必修選択科目（現在は 1 期のみ）で、ドイツ語・中国語・ロシア語から選択可能であったが、現在は中国語とドイツ語が提供されるのみである。中国語とドイツ語はクラス数がそれぞれ 12 と人数的にもほぼバランスは取れていたが、今は 7 クラスまで減っている。さらに 1 期 2 期とも授業時間は 90 分、週に 1 回のみという状態である。3 期目として、1・2 期の語学試験に合格した学生を対象に、自発的に週 1 回の継続教育授業を実施している。この授業には、対象者の半数から 3 分の 2 の学生が参加している。しかし、1 回 90 分の授業を 3 期通して（計 45 回）受けても、当然のことながらドイツ語を流暢に話すレベルまでには達しない。また、全学生が中学、高校、大学で 7〜8 年間英語を勉強しているが、そうした長年の語学教育にもかかわらず、多くの学生は英語をうまく話せないし、何らかの規制が働くのか話そうと試みることもない。その理由として考えられるのは、中学・高校の 1 クラス当たりの人数が多すぎることや文章を書いたり話したりするような言語表現ではなく、受容的な読解力や理解力に重点が置かれていることなどである。これに加え、言語的な間違いを犯すことへの恐怖心も指摘できよう。社会学的アプローチを試みる研究者の中には（白石、朝日新聞、2013 年 6 月)、日本人は自分の意見を持つことがないために英語でも表現できない、ということに英語が話せない／話したくないことの原因を見る者もいる。しかし、これは日本においても当然のことながら様々な観点から論じられている「和」の神話を打ち破るために、むしろ社会批判の観点から捉えられるべきである。

2019 年 11 月の時点でも、日本の外務省は日本政府が 2020 年までに留学生の数を 12 万人に倍増させるという目標に拘っていた。グローバル化が進む世界では、外国語や異文化理解などの貴重なスキルを身につけて活躍できる優秀な人材が求められている。このため、外務省では日本人学生の海外留学をこれまで以上に奨励しているのである。

（学生交流プログラム、 https：//www. mofa. go. jp/policy/culture/people/student/index. html）

（日本およびアジアにおける高等教育の国際化と学生のモビリティ

https：//www. jica. go. jp/jica-ri/ja/publication/other/l75nbg0000108nmr-att/Background_Kuroda. pdf ）

https：//www. nippon. com/en/japan-data/h00446/year-round-hiring-aims-to-spur-more-japanese-students-to-learn-overseas. html

このような背景があったにもかかわらず或いはそれが故に、面白いかもしれないと思えたのが英語の語学コースを利用したヨーロッパ研修旅行を提供することであった。インセンティブとして、また、より多くの参加学生を獲得するために、研修旅行のテーマを意図的に「ヨーロッパと英語（in ドイツ)」とした。旅行を計画する上で予め考えていたのは、研修旅行に参加することによって、学生は個々の言語の重要性や自分の考えを持ちそれを表現することの重要性をすぐに認識するであろうということであった。それが目標であり、そのための計画であった。ここで指摘しておきたいのは、2006 年時点で既にワイマール大学においてドイツ語コースを受講するドイツ研修旅行を実施しており、10 名の学生が自発

的に参加していたことである。しかし、その後の 3 年間はドイツ語研修旅行に関心のある学生が少なかったこともあり、「ヨーロッパと英語（in ドイツ）」というタイトルへと変更するに至ったのである。

3.1 交流プログラムの開始：ヨーロッパへの研修旅行

上記のような経過をたどり、2010 年 3 月に本学の協定校である東京都市大学との 2 週間半の合同研修旅行「ヨーロッパと英語（in ドイツ）」を企画し、26 名の学生の参加を得た。こうして一つは日本の大学同士（地方と首都）の間で、もう一つは受け入れ担当者、教員、現地の地元住民などとの間というように、二重の交流が行われた。オーガナイズしたのは全てドイツの ESP である。

4　安定した受け入れ先かつ仲介者としての ESP

4.1 ツヴィッカウに拠点を置く ESP　－　ESP とは？

ツヴィッカウにある ESP（ヨーロッパ研究プロジェクト）を紹介してくれたのは、日本在住のドイツ語教員である。彼女自身は 2009 年夏にイェーナで開催された国際ドイツ語教員デーで初めてその存在を知ったと言う。残念ながら、今般のコロナの影響を受けて ESP は業務継続を諦め解散してしまった。ESP は、ドイツの他に主としてロシア、カザフスタン、モンゴルといった高校間の学生交流をサポートしていた。生徒たちは未成年であるため、学生交流には多くの個人的サポートを必要とした。ホストファミリーやユースホステルを利用するだけでは制限を受けるため、数ヶ月以上の長きにわたって滞在できるよう、ESP はツヴィッカウの近くにバスルームと 3〜4 人用のベッドを備えたワンルームマンションを用意した。マンションの 1 室には、設備の整ったキッチンや共用のダイニングルームなどが設けられている。生徒の食事は ESP スタッフが調理し、引率教員にはマンションの 1 室が提供された。こうした環境下で、生徒たちは交流先の学校で新たな友人を得ることも、また盛大な歓迎をも体験することができ、その経験は実り豊かなものとなった。その副次的な効果として、この交流に参加したドイツのギムナジウムでは、他のギムナジウムよりも多くの学生がロシア語を選択するようになり、その結果ドイツ人学生のロシア旅行が実現することとなった。交流は互恵的なものだった。また、ESP はアラブ首長国連邦からの国際的な音楽・芸術専攻学生のケアもしており、ツヴィッカウで高い評価を受けた学生も何人か参加していた。このように ESP は多くの経験を有し、臨機応変の対応ぶりなど非常に柔軟性に富んでいた。

5　2010 年 3 月の訪問

2010 年 3 月の第 1 回目の訪問では、宿泊先をユースホステルとし、東京や室蘭からの参加学生もドイツを始めとする各国の生徒や学生、家族と触れ合った。送迎・移動は ESP のスタッフが ESP の所有車で行い、監督役も兼ねていた。8 人乗り＋運転手付きの車を使い 2 つのグループに分かれて行動し、英語のレッスンはドイツ在住のロシア人英語教員と英語および文学の修士号を持つドイツ人教員が担当した。この組み合わせは、授業の進め方や学習スタイルだけでなく多くの新しい異文化体験を日本人学生に与えてくれた。3 時間のレッスンは、ツヴィッカウの近くにあって非常に環境の良いユースホステルの部屋で行われた。ユースホステルのマネージャーやヘルパー、ESP のスタッフたちは、一つの大きな家族のような印象を与える存在で、学生に対して非常に献身的かつ親切に接してくれた。

ヨーロッパ研修旅行ということもあり、ルクセンブルクやストラスブールなど国境に近い様々な都市や地域を訪れてその地のユースホステルで宿泊したり、ツヴィッカウからプラハへ日帰り旅行を行ったりもした。研修日程には 3 日間のベルリン滞在も組み込んだ。これらすべての場所で、学生たちはヨーロッパの歴史的・社会的背景やつながりについて学び、実際に肌で感じる体験をした。彼らは、ヨーロッパの概要をより具体的なものとして身につけ、その歴史的文脈への深い洞察に誘われたようである。毎日の体験はほとんどの学生にとって全く新しいものであった。夜には ESP が主催するイベントがあり、学生も積極的に参加していた。例えば、ドイツ語しか話せない経験豊富な歌手とダンサーが出演し

たダンスの夕べなども催されたが、その女性歌手の温かく心に訴えるような魅力的な話し方は、学生たちに自分も「やってみよう」という気を起こさせるといった具合で、大きな相乗効果をもたらしてくれた。

それ以外にも、ユースホステルのエリアでのバーベキューパーティー時、ESP のマネージャーとそのスタッフによる昔ながらのソーセージ作りの実演などがあった。学生たちは、衛生規則を遵守してソーセージ作りに挑戦した。これまで何度も登場した「ESP 責任者とそのスタッフたち」だが、その言葉を何度繰り返しても彼らがどれだけ強い信念と責任感をもって交流に尽力し、実際に何を成し遂げたのかを言い表すことはできない。学生の心に触れそれを揺り動かした彼らのケアとその出会いは、まさに模範的なものだったと言えよう。彼らは仕事の人間的な側面を非常に大事にし、同時に模範的なやり方でそれを実践した。彼らはこの組織の最も貴重な部分でありモーターであり心臓部であった。

6　予期せぬ進展：大学との提携

2 年連続（2010 年 3 月、2011 年 3 月）で「ヨーロッパと英語（in ドイツ）」研修旅行を企画し、それを成功裏に終了させた（それぞれ 15 名以上が参加）ことがきっかけとなり、室蘭工業大学国際交流センター長（当時）は、ケムニッツ工科大学と西ザクセン応用科学大学ツヴィッカウ校との提携に関心を示し、その実現に向けて動いた結果、両大学との間に公式なパートナーシップが成立した。それを受け、2012 年 3 月の第 3 回欧州研修旅行の企画に先立ち、両大学の国際担当部門と連絡を取り、両大学の各学部の見学やガイドツアーが研修日程に組み込まれることとなった。ESP は、すべてに亘りその詳細に至るまで両大学と直接協議できる立場にあったため、重要なコンタクト・インターフェースとして機能した。スケジュールやその内容、移動などに関して問題なくスムーズに調整することができたのは、我々にとって ESP が全幅の信頼を置ける存在だったことが大きい。

こうして 2012 年、両大学への公式的な訪問が始まり、西ザクセン応用科学大学ツヴィッカウ校の学生と室蘭工業大学の学生との交流会が開催された。その際、室蘭工業大学の学生が日本での生活や大学の様子を面白おかしく紹介してくれたおかげですぐに打ち解けたムードになり、両大学の学生同士の交流はよりスムーズに進んだ。

研修旅行が終わりに近づいた頃、学生たちは夕方になるとユースホステルの食堂や談話室に集合し、それまでに受けた印象や考えたことを文字にしたり、グループに分かれて大きなポスターを制作したりした。滞在の最後には、様々な形でサポートしてくれた人たちに英語でのプレゼンテーションを行った。3 回目の研修旅行を終えた 2012 年、両大学との間で交流協定に関する交渉が始まり、その年の内に協定が締結された。

室蘭工業大学と西ザクセン応用科学大学ツヴィッカウ校の交流に話を戻すと、交流協定が締結されて間もなくのこと、既に 2012 年にはツヴィッカウから最初の実習学生が室蘭工業大学を訪れ、半年間滞在している。意思の疎通は主に英語でなされたが、その影響もあって海外留学を志向する学生が増え、長期の留学を希望する学生も現れてきた。その後の数年の間に、ツヴィッカウで実際に 1 年間の留学生活を送った学生は 5 人を数えるに至った。2013 年になると、交流において益々その重要性を増した ESP は新たな役割を担うこととなった。ESP は、大学関係者だけでは手の回らない部分までカバーすると同時に、ホームステイの雰囲気まで学生に提供した。そこから 2019 年までの研修旅行には、平均 13 名の学生が参加している。宿泊先として、交換留学生のための上述された宿泊施設が提供されることとなった。朝と夜、ESP のスタッフが学生たちのため自ら調理する姿は、学生たちに好感を持って受け止められた。また、ESP 責任者の家の庭でパーティーも催され、近くに住む彼の家族も加わりホームステイ的雰囲気作りに努めてくれた。唯一のマイナス点は、筆者以外の女性によるケアが手薄になったことかもしれない。しかし、この点は西ザクセン応用科学大学ツヴィッカウ校の非常に熱心な女性教員たちがカバーに努めてくれた。カリキュラムに関しても、英語教員たちは室蘭工業大学の学生たちのために毎年特別なものを提供した。授業は、英語学科の学科長とその彼女の教え子そしてネイティブスピーカーの

教員が担当し、一日はライプツィヒの歴史や歴史的転換点から現代までを網羅した英語ガイドツアーに当てられた。これは学生にとって非常にハードな時間ではあったものの、彼らに深い印象を残した。滞在終了後のアンケートでは、学生全員が英語の授業を「非常に良かった」、「良かった」と評価している。

7　外に開かれた窓：外国語とモチベーション、資格

これまでの取り組みはどんな成果を生んだのだろうか？　それは見るだけの旅行ではなく、語学と文化を学ぶ研修旅行であった。学生たちは外国語の必要性を強く認識したし、他国にも興味を抱くようになった。資格を得たわけではないが、少なくとも将来自分の就く職業のために重要な経験をしたのである。ヨーロッパ研修旅行後に学生が記入したアンケートや体験談のレポートを見ると、語学研修旅行から多くのことを学んだことがよく理解される。ほとんどの学生が「英語の良さにやっと気付いた」「自分のために学ぶことが少なすぎたと後悔している」と答えていた。語学研修旅行で彼らが生きた実例を目の当たりにしたことは、自らイニシアチブ取って自分の目標に向かって努力するために必要なモチベーションアップにつながった。

また、ESP の面倒見の良さも好評だった。押し付けがましさのない気配りやそのホスピタリティーに、学生たちは何度も驚いていた。そんな経験をするとは思ってもみなかったのだろう。現実世界では、ドイツ人を含めたヨーロッパ人が全員彼らのような人間ばかりではないにしろ、この最初の外国との出会いや、その国に住む人々との出会いは、後に直面することになる様々な問題を乗り越えて行く上できっと力を貸してくれることだろう。感情が生まれるのは人と人との交流からであり、それは前に向かって踏み出す力を与えてくれる。

そのことを覚えておくだけで、学生は心が広く親切な人間がいることを確信できるだろう。好奇心を忘れず人に優しく接し前向きな姿勢を保っていると、ほとんどの場合、再びポジティブな経験が訪れ、結果的に自己活性化のスパイラルへと導かれて行く。

もう一つの重要なポイントは、ESP の蝶番的役割だった。前述したように、7〜8 時間の時差があると、すべてを現場で計画するのは困難となる。また、相手大学も人手は足りずすべて手配することは不可能である。ESP がこの重要なポジションを担うことで、両協定校は語学教育や学生間の交流、それぞれの大学の紹介、インターンシップ、大学院、交換留学、奨学金などの可能性の話も含めたそれぞれの内容に集中できるようになった。

問題：「どんな結果となったのか」については、既に上で一部触れているが、ここで再度取り上げる。たった 2 週間半の研修旅行でも、そのような経験をした後では（アジア以外の）外国への恐怖心がなくなり、自分たちで率先して行動しようという気持ちがずっと強くなっていた。彼らは長期滞在や留学が不可能ではないと思うようになり、抑制の閾値が大きく下がった。当初、ユースホステルに宿泊した時、その先にこうした展開が待ち受けていようとはほとんど誰も想像できなかった。経験が教えるのは、金銭的に余裕のない身としてはホテルに拘泥せずともユースホステルで困ることはあまりなかったことである。また、滞在中はそこが英語圏ではないため、英語を積極的に使えないこともあったが、最終的には自信を持って英語を話すことができるようになった。ブロークンな英語でも目標を達成できたこと、そして間違いを犯しても大丈夫だということを実感したことで、将来、英語をマスターするために必要な自信も生まれた。さらにその地の言葉を少しでも口にすると、初対面の雰囲気が急に和やかなものに変わるということを学生たちは身をもって学んだ。

8　展望および結論

改善が加えられるべき点が多いのは事実だが、毎年その内容をさらに濃いものとするヒントや新たな可能性の発見もある。

何と言っても先ず強調しておきたいのは、この研修旅行が観光だけに終わるものではないということ

である。結果が出るまでに早い遅いの違いはあっても、就職面接で海外での経験の有無を問われた時には、その経験がものを言うことになる。既に経験している者にとっては、それが短期間のものであれ面接担当者の質問に対して自信を持って対応し、説得力のあるポジティブな回答をすることが可能となる。またヨーロッパ語学研修旅行に参加した学生たちは、参加しなかった友人たちにその経験を伝えることでポジティブな相乗効果を生み出すこととなる。それにより自分で色々な奨学金の可能性を探ったり、国際交流センターで他の可能性を問い合わせたり、大学にいる留学生と話をしてみたりと、学生は様々なアイデアを思いつくようになる。その行動に変化が見られるようになるのである。このようにポジティブな意味で、経験という種子は芽を出し、そして幹を伸ばし枝葉を広げて行く。中高生の 8 割近くが仕事で英語を使いたくない、海外で働くことに抵抗があるという吉田の論文（2012）に照らせば、まさにこの点の重要性が理解されるであろう。

9　自己批判および展望

一旦立ち止まり他にどんな可能性があるのかを探ってみることも必要である。例えば、ドイツの学生が日本や北海道の冒険に参加する光景を想像してみよう。実にエキサイティングなことではないか。確かに、交通費や滞在費など費用の点では常に問題が付きまとう。しかし、決して解決できないことではない。早めに準備し、目の前の課題を一つずつクリアーしていけば、自ずとゴールは近づいてくる。また、室蘭・ツヴィッカウ両大学の専門科目担当教員のより積極的な姿勢にも期待したい。両者が車の両輪として機能すれば、ドイツ人留学生の数を増やすことも不可能ではない。現状を変革することが一見して困難と思われる場合でも、強固な意志を持ち粘り強く取り組むことが変化や問題の解決を招来する。具体的には、先ず言語・専門科目を通じての人的交流の活発化に努める必要がある。そこから例えばエネルギーや再生可能エネルギー、サステナビリティーなどの大きなテーマから個別の電気や水（利用）、材料とその利用法などに至るまでの共同研究への扉が開かれることになるであろう。両大学のみならず他の協定校が取り組んでいる研究にも共通点は少なくない。互いに留学生の増加に努めれば、異文化経験をしながら一緒に研究したりプライベートな時間を共有したりすることが可能になる。それを実現して行く過程の一つとして、その準備のために特に日本人学生は色々な手段を用いて研究テーマに関する様々な原文を読み込む必要があるであろう。その能力を身につけなければならないことは言うまでも無い。

この体験報告の目的は、専門的な計画を詳細に亘って提示することではないが、上に挙げたような幾つかの具体例に沿って計画を組むことにより、多くの学生にとってヨーロッパ研修旅行はよりその名にふさわしいものとなり、内容の充実したものとなるであろう。残念ながら、コロナ対策が始まってからというもの、こうしたプロジェクトの実施はより困難さを増している。今後ヨーロッパ語学研修旅行が再開されたとしても、もはや ESP は存在しない。我々にとっては大きな損失である。新たなルートの開拓とともに研修旅行に関心を持つ学生自身がその準備に際しては自覚的かつ積極的であることが求められる。